

21 世紀の仏教

金剛大学校 学長
チョン 鄭 ビョン 柄 ジョ 朝

1. 未来社会の展望

人類の未来に対する厳密で科学的な認識は不可能である。なぜなら未来には常に予測できない心理的、社会的相関関係の要因が数多く潜んでいるためである。我々はただ今日の現実をもとに可能な限り未来を推し量るしかない。特に精神文化というものは複合的基層であるため、ある意味においては現実の精神的状況から導き出される因果の循環とも言える。

主題をより明らかにするために「未来」という概念を 21 世紀までに限定する。またその空間も韓国社会を中心に記述することが望ましいと考える。おそらく未来の韓国社会が受けるであろう深刻な挑戦は次の二つに集約できると考える。一つめは、民族の生存を脅かす武力挑発の可能性と、それによって引き起こされる社会的不安心理の高調である。二つめは、情報化の未来社会において受けうる精神的葛藤、ないし彷徨の路程である。我々は特に二番目の問題に対し、仏教の思想的寄与を考えてみようと思う。本質的に仏教の領域は、人間の精神世界の問題にその焦点を置いているからである。

周知の通り、韓国社会が近代的な産業国家として生まれ変わったのは 1960 年代初盤である。その産業化の歩みは絶え間なく進み、特に製鉄、非鉄金属、造船、機械、電子、科学などの六つの分野に集中されている。今や平均的韓国人のイメージは悠々自適の牧歌的なものではない。牛に乗り笛を吹く田園的な姿ではなく、溶鉱炉の横で汗を流すヘルメットのイメージに変わっているのである。もし今の時代を産業化の過程だと規定したら、次のような西洋的な人間性の変貌に対する指摘がそのまま我々の問題であると認めざるを得ない。

現存在の保護のための巨大なメカニズムは個人を機能と判断し矮小化する。このようにこのメカニズムはかつて「伝統」で人間を包んでいた実体的な生活の内実から個人を引き離してしまう。ここでは事物や人間に対する愛情は消滅する他ない。人間の尺度が平均的な作業能力で評価されるとき、一人の個人としてどうなろうと省みることはない。その個人は一般的なものであり決してその人自身ではない。自身のことを何も望まない人たち、そんな人たちはすでにこのような生活をする運命にある

マムフォード (Mumford) の指摘を精神文化的な側面から分析要約すれば、まず伝統的価値観の没落、次に個性の喪失及び画一化、三つ目に即物的風潮などが指摘される。未来の精神文化は理想的と言うよりも、即興的で物量的な画一主義の風潮として現われると憂慮される。特に産業化の歴史が西洋に比べて短い韓国社会ではそれと反比例する精神的葛藤を受けるしかないのかもしれない。

2. 明日の精神文化の暢達のための仏教の役割——その理念的彷徨を中心に

正法の具現

本質的に見て、社会を動かす力は人間の心である。仏教的な理想社会は僧伽 (Samgha) である。これは和合を理想とする共同集団という意味である。結局構成員の心によって仏国土と五濁悪世は別れる。このため世間を維持する様々な因縁の始まりを適切に扱う努力が必要である。言いかえれば、創造的精神文化の動因はまさに個人の意志と深く関係しているということである。

法 (Dharma) は生命の実相であるだけでなく、その人間の意志の志向である。人間と人間、人間と自然界、そして

人間と宇宙の間に実現されるべき当為である。その原理がまさに六相であり、還滅縁起であり、理事無碍の和諍である。

調和と寛容の論理

調和のための基本的な仏教的理想は縁起から始まる。縁起は宿命的に関連する宇宙の存在様態である。よって個人と社会、精神と物質、神聖と汚れの差の間にも常に関連性と同質性が有り得る。すなわち「一中一切」、「一切即一」である。この社会は決して対立的で闘争的な出会いの場となってははいけない。むしろ私と他者が互いに依存しながら生成と消滅を繰り返す関係の実存である。

過去の精神文化でのように仏教はこれからも寛容を実践することのできる価値のある教えである。慈悲を標榜する宗教間の葛藤は無知による排他性に起因する。のみならず宗教的象徴を絶対化するとき、その排他性は熱烈な信仰心まで発展していく。未来の韓国社会は宗教的多元時代であるだろうし、この仏教的寛容の精神は未来の精神文化に必須的に求められる潤滑油である。

利益衆生

衆生を利する仏教の理念的人間像は菩薩である。菩薩は善方便によって世俗を教化する慈悲の具現者である。彼らの実践的修行を経典では次のような五つに要約している。一つめ、お釈迦様の正法を広げ無量衆生を悟りに導くこと、二つめは外道の邪悪な見解を砕くことのできる理論的な力を持つこと、三つめは仏法をより良く教えるために研究し磨くこと、四つめは衆生の様々な苦痛をなくす実践的な慈悲の修行、五つめは衆生の財利を揃えるために善方便を駆使することなどの五事である。

菩薩の実践徳目として列挙される四攝、四無量、六波羅蜜などは全てこれと同じ精神の土台の上に立てられた指標であると言える。人類の精神文化を病ませてきた根本原因は理性と現実を調和できない般若智の欠如、そして「所有」だけを美德とする間違った価値観の反乱によるものだったと言える。

内面の自由

仏教は生命の同質性を強調する教えである。人間の身分を出身によって決めていた執拗な階級意識を世尊は否定した。世尊が本質的に言わんとした点は内面的抑圧からの自由であった。すなわち私を取り巻く外部的条件からの解放よりも、私の内面にある間違った貪著心を取り除く道こそが涅槃であると強調した。しかし今日、イデオロギーの対立や社会的不平等の制約などに対する関心は徹底して外部志向的特徴を持っていると言える。しかし人間はその批判の矛先を自分自身に向けるべきだと考える。仏教の立場から見れば、今日の色々な葛藤と不協和音は決して均等な経済的配分や現実否定だけでは解決できないのである。むしろ内面の平和を拡大し、その社会の支配的傾向とすることこそが切実な課題であると言える。それは未来の精神文化に向かう仏教的な発言権になりうる。「自性成仏」、「一切衆生悉有仏性」、「心即仏」などの仏教的な教えは全てこの人間の内面を追求する水準の高い哲学と言える。

欲望と節制

精神文化の未来に対する予測を悲観的なものにしている重大な原因は享樂的な消費風潮の蔓延である。これは謙譲と節制を美德とした伝統的倫理意識を崩壊させた。また内に秘められた情緒と良心を麻痺させてしまう。よって未来の韓国人は伝統と倫理に関しては文化的根無し草、重度の不感になるかもしれない。伝統的精神文化を淘汰した社会は、必然的に不条理を宿す。ここに技術と人間、物質と精神文化間の正当な秩序回復が成されるべきだという切実な所為が生まれるのである。

その仏教的な答えは「欲望の節制」である。焼けつくような喉の乾きや渴愛、野獣のような所有欲の奴隷ではなく一心の源に帰し本来の人間の姿に戻るのである。よって未来の精神文化に対する挑戦を克服する力は、人間の本性からの覚醒と善を追求する意志のエネルギーである。これが精神文化の主導的勢力として影響力を発揮したとき、ようやく三界六道の生存様態を超えることができる。精神世界の傲慢と墮落が作り上げた当然の因果の循環こそが暗鬱な精神世界の到来を予測せざるをえない状況にしている。反面、その開拓的な意志の宣揚もまたこの欲望の節制によらねばならない。

空と中道

人間の生活を制約する様々な要因がいつそう多様化しており、先鋭化することが産業社会だとしても、その本質においては現代と未来ではそう変わらないと考える。使い捨てのような生の有限性、主観と客観の無常性、そして苦悩の深化は宿命のように人間にのしかかっている。しかし人間はそれと同じ制約に囲まれた存在であるだけでなく、それを乗り越える選択の意志を持つ存在でもある。仏教はまさにこの選択の意志を通じて新たな地平を示す教えである。三空の海、だからこそ対立と偏見が止揚されるのだという中道の論理がそれである。中道は空・仮・中、三諦の論理を前提にした実践的理念だ。現実を無視せずに、理事を円融すべく調和する彼岸への架け橋だ。未来に押し寄せるであろう崩壊した価値観の原因は事物の無自性を洞察できない分別智によるものなのかもしれない。空の海に虚無と対立を入れてしまっただけでは絶体絶命である。

3. 未来精神文化の僧伽——その実践的方案の模索

僧伽は本質的に修行の集団でなければならない。と言っても社会の中の真空状態で常存するのではなく、社会のための特殊集団としての機能が活性化されるべきである。しかし現実の僧伽は未だに復古の囲いの中に安住しているように感じる。もし今日の社会のなかでの僧伽の役割を考えてみたとき宗教儀式（葬儀、法会、各種齋日）くらいのもので、その命脈を忘れていると言っても過言ではない。

仏教は今、これ以上「過去の栄冠の記憶」に留まっていはいけぬ。伝統の遺物展示館でもあるまいし、「見せ物」だけでもない。衆生の苦痛に満ちた生の現場に灯となる生命力のある価値基準として昇華されねばならない。

未来の僧伽が望ましい精神文化の導き役として立ち行くために最も必要な要件は仏教人の覚醒である。大乘精神の普遍化と未来志向的価値基準が切実に求められるものと考え。むろん人事管理、組織改編など宗団の行政的支援が伴わねばならない。筆者はこのような問題点を解消すべく次のような具体的な実践を主張したことがある。

第一に、僧侶と信徒の間に中間法階を新設すること。彼らには「菩薩」、「善知識」などの法階を付与し社会教化事業の積極的な推進を担ってもらおう。

第二に、寺院の機能を活性化すること。寺院を教育の場としてレクリエーションを楽しむ健全な文化空間として活用せねばならず、社会福祉の産室として認識されるようにする。

第三に、法会方式を改善し利益衆生の方向で昇華しなければならない。サンデー・ブディストになつてはならない。仏法の生活化、理想の顕正化のための方向として法会儀式が変わらねばならない。

第四に、仏教学の振興だ。事実、韓国仏教の世界史的意義は決してその信行の卓越性にのみあるとは言えない。むしろしっかりした教学的な下地の上に実践という重み加わるべきである。論理的な妥当性のない盲目的な信仰の世界は砂上の楼閣でしかない。

第五に、仏教学の現代的解析である。周辺の学問との連携、新たな視野の拡大などが重要な課題である。掘り進めることの難しい思想の源泉を未来のエネルギーとして転換していく努力が必要であるとする。

このような仏教の全体的な反省と合わせて、社会の認識も新たな角度から光を当てる必要がある。仏教の世界が投げ掛ける暗示と象徴を理解しようとする純一な姿勢が求められる。それができなければこの両者の間には埋められない大きな溝ができてしまう。それは互いの将来のために極めて不幸なことであることを指摘せざるにはいられない。

仏教は常に新しく解釈されねばならない。明日の精神文化を示す利己と独善の不連続線をなくし、壊れた価値観を正すための精神的革命が追随されねばならない。我々はその新たな価値秩序のひとつの典型が仏教から見出せると考える。心の灯を探すこと、生の意味を見えない世界に沈潜させる知恵、そうして生命の価値を水平的な脈絡から理解する願行などは、何時何処でも仏教が強調してきた理念的、実践的心理であった。

もし我々の仏教がその希望のメッセージを未来の精神文化の中に拡散できるとしたら、我々には希望があると言えることができる。それは仏教人の矜持であると同時に仏教が持つ未来志向的な発言権であると信じる。

4. 多宗教社会での仏教

仏教の目的は成仏にある。墮落した人格を正し、正しく生きる道を開いていく過程を求道と言う。初期の仏教ではこのような理想郷を出家を中心に理解していた時期がある。すなわち、生の苦痛を規定し、その苦痛の原因は内面の三毒に情状する。そして正しい八つの修行を通して涅槃という理想の境地を体得できると考えていた。しかし大乘仏教の登場によりこのような二分法的な等式は徹底的に批判された。無明がすなわち悟りであり、世俗が涅槃と違わないと宣明された。『般若心経』で言われる「色即是空」である。煩い世俗を離れ、清浄の世界が別にあるのではない。煩悩を満たすための利己的なエネルギーが解脱に向かう努力に変わらねばならないと力説する。その人格的なモデルが菩薩（Bodhisattva）である。自利の実践遂行の代わりに利他が成仏の近道だと強調している。後期に入ってはこの自利と利他もまた切り放すことの出来ないものという主張が台頭する。しかし究極的実在（ultimate reality）に対する仏教の接近態度は非常に「柔軟」である。韓国仏教を基準として言えば参禅、看経、祈祷、念仏、萬行などの手段がある。むろん、「禅」優越的な傾向のために頓悟頓修を最善策とする見解もあるにはある。しかし衆生の根機は千差万別である。各々の素質と熏習により修行について相対的価値を認めざるを得ない。

我々は時々宗教的価値の絶対性を論議する宗教人を見掛ける。そして自身の宗教が持つ優越性を立証するための護教的な熱情を目にする。彼らは他の宗教が劣っていると主張することで自身の信仰心を自慢しているように思える。しかし仏教は常に相対主義的価値観の土台の上に立っている。キリスト教やイスラム教、儒教であってもそれは真理に到達する手段で有り得るという立場を堅持している。よって歴史の中で仏教は、仏教を信じない人々に対する偏見を捨てるため努力してきたと見る事ができる。宗教戦争、宗教裁判などの経験を持たないことは決して偶然ではないのである。仏教は結局、仏教でさえ超越しようとする教えである。仏教、仏教と叫ぶ時には既に仏教は存在しないのかもしれない。形骸化し観念化してしまった真理の偶像の中で、一人だけの知識に溺れてしまいやすいからだ。

寛容を普遍化すべき宗教同士の対決は、その真理に対する執着に起因する。『金剛経』にある「筏のたとえ話」は、今日の多宗教の中での葛藤に対する隠喩的な批判がこめられている。ある人が川を渡って山に登ろうとしている。川を渡るために筏を作ったが渡りきった後にはその筏が要らなくなる。しかし筏を背負って山に登ろうとすれば結局目的地に到達できない。その人は果敢に筏を捨てなければならない。

我々は世俗を超え涅槃という彼岸に向かっている。世俗を超えるために仏法という筏に乗った。しかし今やそれすら捨てねばならないということだ。にもかかわらずその当為性にすがりつく態度は正に今日の宗教間の対立の根本的な原因になっているのではないか。老子も意味深長な言葉を残している。

学問を修めていると知識は一日一日とふえてくるが、道を修めていると一日一日とその知識は減ってゆく。（為学日益、為道日損）

今日の宗教はもはや「捨てる運動」を展開すべきである。出世して他人に勝つことだけに勇気が要るのではない。むしろ捨てる知恵と勇気を持つべきである。傲慢と偏見、偽善と利己で武装した宗教はすでにその存在の当為性を喪失しているのと同じである。互いの価値を理解しようという謙虚な姿勢によって宗教の真理は立証される。自身の宗教が持つ尺度でだけ他を評価しようとする絶対主義的な信念は中世の遺産でしかない。今、我々は互いの長所を学ぶべき時だと考える。宗教の真理が歴史に適応する過程で犯した色々な非理と矛盾を謙虚に反省すべきである。自分にとって大切なものは相手にとっても大切であるという常識的な認識を広めていくべきである。一体だれが一石を投じるのだろう。

5. 無諍三昧の論理

多宗教の葛藤は「絶対信念体系」に由来する。すなわち相対的価値を認めようとしない排他性によって、自分だけの島の中に引き閉じ籠ってしまうのである。かつて西洋神学者たちはキリスト教という価値で他の宗教を理解し

ようと試みたことがある。絶対神を認める宗教は優等な宗教であり、無神的な宗教は劣等宗教というように仮定した。しかし宗教は無限と有限の架け橋である。永遠に向かう彼岸への「道」のようなものである。よって我々は絶対信念体系を持つ限りほんとうの意味での会話が出来ないという限界に到達してしまう。だからといって信念の体系を変えることもできないのである。だとすれば次善の策としての手段を取るべきである。すなわち自身の信念体系に対する確信は、決して他の宗教に対する憎悪と混同されてはいけないのである。

釈迦は自身を指して無諍三昧を受けた身であると言ったことがある。争わない知恵とは、いくら争いを仕掛けようとしても争いにならない場合を指す言葉である。

「比丘たちよ。私は世と争わない。ただ世が私に争いを挑んでくるのだ。何故なら比丘たちよ。真理を真理だと言う者はこの世のどんなものとも争わないからだ。しかし小さな枝はそよ風にも揺れるが岩は台風でもびくともしない。このように、心ある者は世の誹謗や称賛に動揺することはない。」（「相応部經典」、筆者抄訳）

三昧という言葉はサマーディ（Samādhi）の音訳である。元々精神集中、内面の凝視という意味を持つ単語である。争わないためにはまず主観的な認識の確立が必要である。

客観的な意見に揺らぐことない平常心を持たねばならない。最後の一節「誹謗と称賛の狭間で動揺しない」こそがこの境地である。耐えられないほどの非難と賛辞をじっと堪えることのできる達観の境地である。

まさにこの点が多宗教の中の仏教が持つべき理念であり志向である。しかしこの理念を現実のものとするためには弁証法的段階が必要である。無条件で他を許し相手の挑戦を避ける敗北主義と勘違いしてはいけない。真如の世界は無差別の世界である。仏教式に言えば「空」である。しかし世俗は差別の世界である。善と悪が共存し義と不義が常存する。それなのに盲目的な善へ執着すれば悪との摩擦を産み出してしまう。自身の真理に対する過信が偽善に発展してしまうのと同じである。よって我々は善悪の彼岸に達するよう努力すべきである。すなわち絶対善は善悪の相対的価値基準を超越するという考え方である。龍樹が言った「空」、「仮」、「中」の三諦の論理がまさにそれである。

たとえばここに一株の美しい花が咲いたとしよう。その花の本性は決して美しさだけではない。今まさにつぼみを開こうとする因縁が集まって香り高い姿を現すのである。しかしその因縁が終われば必ず枯れ落ちて無くなってしまふ悲運の主人公である。よってその美しい花を見る瞬間、我々はその本性が「空」であることを把握せねばならない。だからこそその花は「仮」、すなわち偽りの姿である。今、この短い瞬間に美しい姿を見せただけであって永遠ではないということだ。しかし美しくないから、その美しさにも虚妄さにも執着してはいけない。美しさに見とれるのも誤りで、全てのものは無常であるという虚無の檻に閉じ籠ってしまうことも間違った妄想にすぎない。この両方を超えたとき真の自由が開ける。その境地が「中」である。極端な二つの見解を超え、超えたからこそ両方とも包容することができるのである。もしどちらか一方に片寄っていれば決してもう一方を容認することはできない。この三諦の論理は中観哲学の核心であるが、同時に実践的意志としての「空」に対する天命でもある。

我々は多宗教という現実のなかでこのような中道のまことの意味を実践していかなければならない。口を開けば愛と慈悲を説き、それを自分達の教友の間だけで通じる倫理だとする考え方は片寄ったヒューマニズムにすぎない。この世にはイエスを信じる者も生きる権利がある。同時に仏教徒も存在意義がある。また、宗教を持たない者も堂々と権利を持っていることを決して忘れてはならない。

6. 内面の自由とその社会化のための仏教的提言

五

21世紀に入り今日の韓国社会は極端な葛藤と不和に悩まされている。南北間の軍事的対決、政治的対立、労使紛糾と学生運動など先鋭的な葛藤の構造が露骨になってきている。

その原因を産業社会の構造に見出すこともある。ある者はファッショ（fascio）的な政治の独善だと罵倒する。またある者は民主化の過程で起る必然的な痛みだと主張する。彼らの主張にはどちらも断片的に真実がある。しかし今日の葛藤の構造に対する根本的な原因の提示ではないと見る。これは結局、内面の完成を得ていないことで起

きる不協和音であると見ることができる。仏教的に言えば貪・瞋・癡の三毒心の虜になっているのである。今日の葛藤の論理は徹底的に外に向かっている。

労働者達は最低限の賃金しか得られずその上人間らしい扱いをしてくれないから苦しいのだと主張する。企業主は利益を残せないとわめきたてる。少し我慢してくれればいいのにちょっとしたことで集団行動だと言って大騒ぎする。だれも自身が間違っているとは思わない。まさにこの点が今日の問題である。宗教多元化社会での葛藤の論理もまた同じである。自らの宗教さえしっかり信じていれば万事がうまく行くというのである。我々は集団利己主義という病を患っているのである。宗教もまた宣教以外には何の関心もないように見える。

仏教では今日の問題を内面から見出そうとする。完璧な理想社会が広がっているとしても、内面の完成を得られなければそれは砂上の楼閣である。他人に対する批判の矢を自らに向けねばならないと力説する。勿論ここにも問題がある。私の内面的完成がそのまま社会の浄化に繋がるのかという実践的な宿題である。それを宗教的な共同線の領域だと見ることができる。各宗教はその領域に向かうそれなりの過程を経ていくものであると理解すべきである。その過程において宗教は社会化されるのである。

しかし宗教イデオロギーを絶対的なものとして使用していた過去の「栄光」は今日においては全く説得力を持たない。今や宗教が科学、政治、経済、コンピュータまで全ての領域を拡大する時代ではないのである。最終的に宗教は社会の木陰、傷を癒す良心の集団であるべきである。

宗教のイデオロギーを社会現象の全ての分野に当てはめようとするれば、宗教が全ての価値規範のアルファやオメガになってしまう。しかし現実とは全くそうではない。技術集約的科学と宗教的原理は決して混同されてはいけない。宗教的価値は事実 (fact) としてではなく価値 (value) の規範として現われるべきだという意味である。社会化という命題の前に全ての宗教はその実践意志を清浄した倫理性を高めるものと集約すべきである。トインビーの指摘のように未来の宗教は世俗化の道を歩むかも知れない。しかし内面の自由を求める根気強い努力としてこの社会の良心の砦になるかもしれない。そのような観点から見れば今日の宗教は空威張りが過ぎるようである。仏像を作って奉り仏堂を増築することよりも重要なことは、「生きた仏」を育てようという努力でなければならない。わが国の宗教人たちはこの社会化という概念に対して明白な認識が未だに不足している。目まぐるしく移り変わる社会現象の現場で宗教の声を上げることが社会化だと錯覚している。もしくはその宗教の価値を握り締め、現実を嘆くことだけに気を取られている。萬海こと韓 龍雲（訳者注：ハン・ヨンウン、1879～1944. 民族代表 33 人のうちの一人で、仏教界を代表して三一独立宣言を率いた）はこのように言った。世をあざ笑う「手を組む派」、向こう岸の火を見るように自分の私生活だけを追求する「小市民派」、そして事が起れば鬱憤を爆発させる「嗚呼派」などだ。

仏教では不殺を戒めとして守る伝統がある。よって出家者の食肉は特殊な場合を除いて原則的にタブーである。これも単純に不殺だからそうなのかと考えることができる。世俗の栄華や喜びを他人に譲ろうという精神である。美味しいおかずや肉料理は他の者に譲り、自分は硬い草の根で一生を終えようという誓いである。絹の衣やピカピカのスーツは皆に譲ろうという決心の表れである。この精神が生きているとき我々の仏教と歴史は輝いていた。しかしこの精神が色あせたとき、仏教と国は同時に滅びた。この徹底した修道の意志が消えてしまえば、偽物がむしろ本物のように振る舞い始める。

今日、我々はこのような仏教的価値を守るべき時である。この地を十字架で埋め尽くせば神の国が到来するのではない。正しく生きようとする隣家の女たちの胸の内に、孤独なこの時代の知識人の、その全ての胸の内に仏性は間違いなく生きている。我々はその如来蔵を大切に守り育てる努力が必要である。自分以外の価値を認める術を知ったとき、自分の信念はより一層確固たるものになるものである。

宗教の敵は決して私以外の他の宗教ではない。宗教的価値をあざ笑う恥知らずな者達、宗教的真理を無視する極悪人の心性を宗教は正さねばならない。これこそ宗教的な共同体の結成が必要な理由であると考える。